第１９回北海道特別支援教育学会
令和７年度 札幌大会　二次案内

2025年１１/１(土)－２(日)

教育×医療×福祉の視点からケースを探る
－子どもの可能性を引き出すコツはあるのか？

期　日　　２０２５（令和７）年１１月１日（土）、２日（日）

会　場　　北海道教育大学札幌校（札幌市北区あいの里５条３丁目）

主　催　　北海道特別支援教育学会

共　催　　北海道教育大学

後　援　　北海道教育委員会　　札幌市教育委員会

第１９回　北海道特別支援教育学会札幌大会テーマ

「教育×医療×福祉の視点からケースを探る
－子どもの可能性を引き出すコツはあるのか？」

―開催趣旨―

【日々の悩みを解決しよう】：特別支援教育をめぐる教育現場は多様化・複雑化しており、教師や学校だけでは解決できない事例や課題に出会うことが多くなっていませんか？一人で悩んでいる方も少なくないのではないでしょうか。多職種連携の重要性が叫ばれていても、現在の教師の働き方では、連携する時間を確保することが難しいことがあります。そこで本大会では、知識を学ぶことを目的とした従来の講演・講義型のプログラムだけでなく、参加型のプログラムを企画しました。

初日に開催するメインプログラムは【専門家チーム会議をのぞいてみよう】のコンセプトのもと、事例報告者に対し、教育・医療・福祉分野の専門家がケース会議を開きます。前半、参加者はオブザーバーとしてケース会議に参加していただきます。後半は、参加者全員で、事例が抱える課題解決のために、自由にアイデアを出し合う時間とします。

複雑な背景から生じる事例の課題解決には、多様な視点を持つこと、そして多様な視点をバランスよく統合することが必要ですが、どの分野にも共通して言えることは、一人で考えても、なかなかそれを実現することは難しいということです。【他職種・他機関から学ぼう】とする姿勢が必要です。様々な分野、学校種の人々が、対等な立場で真摯に知恵を出し合えば、あたらしい視点が生まれるものです。近年、個別の教育支援計画の作成と内容の充実がうたわれています。児童・生徒のライフステージを見通し、生活全体を見渡す視点を持つためにも、他職種・他機関の人々との交流は重要になってきます。

もう一つ、本大会で大切にしたいことは、学生や若手教員の参加・育成です。【世代を超えて交流を深めよう】と【世代同士の交流を深めよう】のコンセプトのもと、学生による研究発表や若手教員の交流会を企画しました。学生同士、若手教員同士の交流を目的としていますが、経験のある社会人として、参加者の方々にも加わっていただき、学生や若手教員を励ましたり、アドバイスをしていただければ幸いです。

最後に、初日の夜には、市内のお店で、美味しいお酒と食事をいただきながら、情報交流をしたいと思っています。このような会は、通常、大会関係者の参加が主になるのですが、本交流会は、非会員をはじめ、だれでも参加できる会にしたいと思っています。これも学会の重要なプログラムと位置づけておりますので、気兼ねなく積極的にご参加いただければと思います。

【子どもから学ぼう】：子どものありのままの姿から、大人である私たちは、どうあるべきか、一緒に考えていきましょう。

第 19 回札幌大会　大会長　安井友康

１．日　程

令和７年１１月１日（土曜日）

10:30～	11:00～	13:00～14:30	14:45～16:15	16:15～17:15		19:00～21:30
受付	理事会・総会	グループセッション①	グループセッション②	ポスター発表	（移動）	レセプション
		グループセッション③	グループセッション④			

令和７年１１月2日（日曜日）

9:00～	10:00～12:00	12:10～13:10	13:20～15:20
受付	学会企画シンポジウム①	若手教員による交流会	学会企画シンポジウム②
	自主シンポジウム①②	学生による交流会	自主シンポジウム③④

２．プログラム

１１月１日（土）１３：００～１６：１５

【グループディスカッション】

教育・医療・福祉分野の協働による専門家チーム会議をのぞいてみよう、のコンセプトのもと企画しました。多職種によるライブディスカッションに、オブザーバーとして参加してください。通常学級、通級指導教室、特別支援学級、特別支援学校の４つ事例について検討します。

グループディスカッション①：通常学級の事例検討　　３０４教室

テーマ：「発達障がいのある子どもの自己肯定感を育む支援・指導」

概　要：発達障がいのある子どもたちが、自分の良さが分かり、その良さを強みとして前向きに生きていけるようになるために、支援者は何をすればよいのか。皆さんで考えてみませんか。

座長　　齊藤真善（北海道教育大学札幌校）

事例報告者　工藤雅文（札幌市教育委員会）

グループディスカッション②：通級指導教室の事例検討　　３０４教室

テーマ：「本人の願いを中心にした通級指導教室における支援（仮）」

概　要：通級指導教室には、さまざまな状態像を示す子どもが通っています。本人の願いを中心としながら、どのように通常の学級での適応を促していけばよいのかを皆さんで検討できればと思います。何から支援すべきなのか、どのように支援すべきなのかを悩んでいる事例です。

座長　　山下公司（北海道教育大学札幌校）

事例報告者　岩渕友美（札幌市立南月寒小学校）

グループセッション①と②の各分野の専門家

〈教育〉　工藤雅文（札幌市教育委員会　指導主事）

〈医療〉　末田慶太朗（札幌市子ども発達支援総合センター　児童精神科医）

〈福祉〉　小玉武志（北海道済生会小樽病院　作業療法士）

グループディスカッション③：特別支援学校の事例検討　　306 教室

テーマ：「行動上の課題を持つ生徒の特別支援学校高等部卒業後を見据えた支援の実践」

概　要：卒業後の活動や参加に制限があることが予想される、重い行動上の課題がある自閉症を伴う知的障害の生徒に対する指導支援の方法に関し、各分野からの意見を参考に実践の検証・検討をしたいと考えています。

座長　　青木一真（札幌伏見支援学校もなみ学園分校）

　　木村牧生（市立札幌豊成支援学校）

事例報告者　松永真美（札幌伏見支援学校もなみ学園分校）

グループディスカッション④：特別支援学級の事例検討　　３０６教室

テーマ：「思春期の課題に向き合う多職種連携の実践」

概　要：軽度知的障害および ASD の中学生が抱える進路選択や心理的傾向などの多様な課題について、医療・教育・福祉の立場が連携しながら多角的に検討を深め、将来の可能性を引き出す支援の実践的なヒントを探りたいと思っています。

座長　　清都康雄（北海道教育大学教職大学院）

事例報告者　津田良介（北海道教育大学附属札幌小学校ふじのめ学級）

菅原祐司（北海道教育大学附属札幌中学校ふじのめ学級）

グループセッション③と④の各分野の専門家

〈教育〉　坂内　仁（北海道教育委員会　主査）

〈医療〉　柳生一自（北海道医療大学　教授・児童精神科医）

〈福祉〉　坂井翔一（札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる　所長）

【ポスター発表】　　１６：１５～１７：１５　　講義棟３階フロア

P-1

「特別支援学級担任の個別の指導計画作成に関わる負担感の構造」

石田正継（札幌市立義務教育学校定山渓学園）

特別支援学級担任は「個別の指導計画」の作成に大きな負担を感じている。筆者は作成支援システムを作成し、負担感軽減に一定の効果が得られた。しかし、目標設定や評価評定の負担感減少が課題である。そこで、特に定量評価の難しい日常生活の指導のアセスメントを支援するルーブリック評価を作成した。本研究ではルーブリック評価が負担感に与える影響を明らかにすることを目的とするが、今回は速報値を報告する。

P-2

「自閉スペクトラム症幼児におけるタングラム課題遂行時の方略評価」

奥村香澄（名寄市立大学）　　郡司竜平（名寄市立大学）

自閉スペクトラム症（以下、ASD）の幼児（男児）一名を対象にし、タングラム課題遂行時の使用方略についての検討を行った。課題には Osmo（Tangible Pay 社製；デジタル版タングラム課題）を用いた。Osmo のフィードバックを活用し、問題解決を行ったこと、色よりも形に注目した方略が見られた。ASD 児の方略評価やフィードバックへの反応を評価することにより、効果的な声掛けやヒント提示についての一助が得ることができると考えられた。

P-3

「ホワイトボード・ミーティング®を活用した『特別支援教育コーディネーターファシリテーション力 UP↑ゼミ』の実践」

田中雅子（北海道教育大学釧路校）

北海道釧路市・釧路町の特別支援教育コーディネーター等を対象とした「特別支援教育コーディネーターファシリテーション力 UP↑ゼミ」（全 12 回）を開催した。本研究は、ファシリテーションの手法の 1 つであるホワイトボード・ミーティング®を活用し、特別支援教育コーディネーターの役割を理解し、校内支援体制を効果的に構築するための演習を主としたセミナーの報告である。

P-4

「知的障害特別支援学校における夢中になる姿から自己実現を目指す授業づくり」

能登祐聡（北海道教育大学附属特別支援学校）
日下部佳奈子（北海道教育大学附属特別支援学校）
小野真理（北海道教育大学附属特別支援学校）
佐藤実華子（北海道教育大学附属特別支援学校）
藤岡宏明（北海道教育大学附属特別支援学校）
菊地　來（北海道真駒内養護学校）　小島洋平（北海道真駒内養護学校）
伊藤美乃（函館市立神山小学校）　細谷一博（北海道教育大学函館校）

本校では児童の自己実現を目指すにあたり、願いを読み取りにくい課題があった。そこで自己実現シートを用い、夢中になる姿から願いを導き、支援者の願いと合わせて 1 年後の姿を設定し授業実践を行った。その結果、課題は残るものの、児童の能力や強みを活かし自己実現に向かう姿が見られた。

P-5

「発達課題理論に基づく継続的支援の実践　-安心と成功体験を重ねるプロセスの意義-」

逢坂一伸　（(有）どれみ）　渡邊将史（(有）どれみ）
藤井美由紀（永山こども発達支援センターぽの）

児童発達支援事業から放課後等デイサービスへの移行過程を体系化。幼児期は「ぽの KIDS」「永山こども発達支援センターぽの」をスタートし、生活習慣や集団適応の基礎を培い、小学校低学年の「どれみ Base」、中学年の「どれみ Grow」、高学年以降の「どれみ Challenge」へ段階的に進む。安心できる環境で挑戦と成功体験を重ね、自己効力感や社会性を育み、最終的に社会参加・自立を目指すプロセスを示している。

P-6

「2000 人の笑顔を生んだ高校生と大学生の街づくりプロジェクト『あい circle』
-地学協働から始まる地域創生の取組-」

解良　和人（札幌あいの里高等支援学校）　髙橋　啓（札幌あいの里高等支援学校）
安井友康（北海道教育大学札幌校）

高校生と大学生が協働して企画・運営する地域イベント「あい circle」は、若者が主体的に地域とつながり、参加者一人一人が主役となって自己実現できる場を目指したものである。40 以上の参加団体とともに、延べ 2000 人が集う大きな交流の場を実現した。次世代を担う若者が地域を動かし、地学協働を基盤とした未来の街づくりにつながる新しいモデルを体現した実践事例である。

P-7

「重度重複障害児の表出行動を促す外的刺激に関する研究」

中村龍平（北海道余市養護学校）　細谷一博（北海道教育大学函館校）

重度重複障害児は，表出が困難であり意思や要求を伝えることが難しいため，彼らの表出行動の変容を分析することは，人間関係の形成を図る上で重要であると考えられる。そこで本研究では，表出が微細な重度重複障害児の外的刺激の変化による表出行動の変容について検討した。その結果，外的刺激に対する表出行動の種類を整理することができた。今後は，表出行動が生起する外的刺激の要因について整理することが必要である。

P-8

「交流学級児童の学校生活適応感に友人関係適応感，被受容感，学業適応感が及ぼす影響」

横山未結(札幌市立石山緑小学校)　蔦森英史（北海道教育大学旭川校）

本研究は児童の学校生活適応感に友人関係適応感・被受容感・学業適応感が及ぼす影響について検討した。その結果、学業満足感が学校生活適応感に最も影響を及ぼした。特別支援学級に在籍し、交流及び共同学習を行う児童は、被受容感及び学校生活適応感が有意に低かった。交流及び共同学習では、学業満足感を感じられる支援体制や良好な関係を築くことができる学級経営が求められる。

P-9

「ひらがな書字成績を用いた読み書き困難児のスクリーニングの有用性
-小学１年生を対象とした調査による検討-」

鈴木輝月（市立札幌北翔支援学校）　蔦森英史（北海道教育大学旭川校）

小学１年生 89 名を対象に、７月に実施したひらがな書字課題の成績が、同年 12 月の読み書き困難児を予測可能かについて分析した。その結果、書字課題のみでのスクリーニングには限界があることが示された。一方で、音読課題によるスクリーニングでは抽出できない児童を抽出できたことや、書字に困難を抱える児童を確実に抽出できていたことなど、書字課題によるスクリーニングが独自の利点を有していることも示唆された。

P-10

「地域との連携を生かした中学校特別支援学級生徒による作業販売会実践の成果と課題」

林　文也（札幌市立西野中学校）　郡司竜平（名寄市立大学）

中学校特別支援学級作業学習、総合的な学習の時間で製品作りから販売や接客まで生徒が計画し、大型ショッピングモールにて作業販売会を実施した。対象は知的障害を有する８名、自閉症スペクトラム症２名である。一般客との接客から自分たちの取り組みを評価改善していく過程を「地域型インクルーシブ教育」の観点で整理した。社会性の育成と地域との連携強化は成果とし考えられ、活動の継続性と評価方法の確立は課題となった。

P-11

「食生活の改善による ASD 当事者の感覚過敏からの回復経験」

片岡　聡（特定非営利活動法人リトルプロフェッサーズ）
菊地啓子（特定非営利活動法人リトルプロフェッサーズ）

発表者らは感覚過敏の顕著な ASD 当事者で２０１８年頃には合理的配慮の提供を受けても社会参加が極めて困難な状態に陥った。このため予防医学の専門医の指導のもと食生活の徹底的な見直しを中心とした生活改善実践を行なった。その結果、感覚過敏が劇的に改善しその状態が現在も継続している。当日は本実践過程での発達性トラウマの状態変化も議論し、食生活改善が ASD 児者の困難を軽減する可能性と注意点について言及する。

P-12

「通常学級で学ぶ軽度知的障害の生徒への文章読解指導の実践とその効果についての検討」

林あいか（幌延町立問寒別小中学校）　蔦森英史（北海道教育大学旭川校）

通常学級で学ぶ軽度知的障害の生徒に対する文章読解指導の実践とその効果について検討した。その結果、設問の難易度調整、対象生徒と親密度の異なる文章内容、視覚的な文章構造による指導の 3 つによって成績向上が認められた。今回の研究によって、文章読解のための手掛かりを増やすことや既有知識を用いた指導、視覚的なモデルを活用した指導の有効性が示唆された。

P-13

「"SMA1 型児童の視線によるコミュニケーション
-ひらがな学習における評価の分析から-」

高橋将春（市立札幌北翔支援学校）　安井友康（北海道教育大学札幌校）

未だ研究が進められていない領域である、重度の肢体不自由がある児童の平仮名習得に向けた、今までの実践の過程を整理すると共に、視線入力装置やプッシュ型スイッチを使用した音韻表象形成のための学習の効果を検討した。

P-14

「札幌市との連携による特別支援教育における学習環境の構築と多様なニーズに応じた支援方法の開発-取り組みの経緯と内容-」

安井友康（北海道教育大学札幌校）　齊藤真善（北海道教育大学札幌校）
池田千紗（北海道教育大学札幌校）　千賀　愛（北海道教育大学札幌校）
山下公司（北海道教育大学札幌校）
川俣智路(北海道教育大学教職大学院)　清都康雄(北海道教育大学教職大学院)
北海道教育大学附属札幌小中学校特別支援学級(ふじのめ学級)"

札幌市の、巡回相談員や医療専門職等の学校に配置している専門職についてその利用状況や効果を検証し、学校の支援体制及び校外との連携体制の強化に取り組むための課題を明らかにする。また、発達障害児の教育・支援方法に関する臨床的研究を進めることにより、関係者の連携内容や役割等を整理し、特別支援教育の幅広いニーズに対応できる教育資料等を検討する。

１１月２日（日）

【学会企画シンポジウム】

学会企画シンポジウム①　　１０：００～１２：００　　３０５教室

テーマ：「ギフテッド・２E 教育の国際比較：北欧と日本から」

概　要：ギフテッドの子どもの個性や特性を理解し、学校における教育・支援につなげるには何が求められているのか。北欧と日本のギフテッド・2E 教育の最新動向、親の会の取り組みに関する報告から議論する。話題提供 1 では、北欧のインクルーシブ教育の研究者から北欧のギフテッド教育として、ギフテッド学校の設立・運営やギフテッドのスクリーニングに着手するデンマーク、プロジェクトとしての「北欧ギフテッド教育ネットワーク」を組織しつつも通常学校の枠組みでギフテッド教育を提供するスウェーデンを中心に報告する。話題提供 2 では、「ギフテッド支援は日本で可能なのか？」と題して、日本の課題を議論する。ギフテッドは日本においては特別支援教育の対象となっていない。そのため，発達障害の併存がない場合，通常学級での支援が十分行なわれない現状がある。ギフテッドの教育ニーズ及び通常学級での支援の必要性と可能性について話題提供を行う。話題提供 3 では、保護者の立場から 2 名による報告を行う。ギフテッドは、才能の一方で学校生活につまずきやすく、その育児にも困難が伴う。子どもたちの学びと育ちを支えるために、学校では何ができるのか。ギフテッド応援隊の全国・北海道アンケートを通じて、現場で求められる配慮や支援について検討する。

座長　　千賀　愛　（北海道教育大学札幌校）
話題提供１　　是永かな子（高知大学）
「北欧のギフテッド・2E 教育」
話題提供２　　片桐正敏　（北海道教育大学旭川校）
「ギフテッド支援は日本では可能なのか？」
話題提供３　　冨吉恵子・吉川陽子（一般社団法人ギフテッド応援隊）
「ギフテッド保護者の声から考える学校での課題と支援」

学会企画シンポジウム②　　１３：２０～１４：５０　　３０５教室

テーマ：「当事者から学ぼう　～これまでの支援についての振り返りを中心に」

概　要：小学校や中学校、高等学校、そして大学での支援について、主に学習面での困りを抱える現在大学生の当事者から対談形式で話を聴いていきます。

座長　山下公司（北海道教育大学札幌校）

【自主シンポジウム】

自主シンポジウム①　　１０：００～１２：００　　３０４教室

テーマ　：「ひらがな習得状況の地域差を考慮した読み書き困難児早期発見・対応のための支援体制構築に向けて」

概　要　：読み書き困難児の早期発見・対応は、海外で先行して行われていたが、近年日本においても取り組みが始まっている（関, 2022）。この取り組みは就学後のみならず（赤尾, 2015）、就学前から早期発見を行うための検査の開発や（Okumura et al., 2022）、支援体制が整備されてきた（蔦森, 2023）。しかし現状の検査の基準値を用いてスクリーニングを行った場合、過剰に読み書き困難児を検出するなどの問題点が指摘されている（奥村ら, 2024）。この要因の一つに、地域におけるひらがな読み習得度の違いが考えられる（樋口・小林, 2024）。また早期介入については、発達性ディスレクシアのための読み書き訓練方法がいくつか報告されているが（宇野ら, 2015）、地域ごとの支援体制整備にどこまで適応可能なのか十分検証されていない。本シンポジウムでは、地域差を考慮した音読検査の基準値作成や支援体制整備について議論を深めたい。

企画者　　蔦森英史（北海道教育大学旭川校）
　　樋口大樹（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）
話題提供　蔦森英史（北海道教育大学旭川校）
　　樋口大樹（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）
　　後藤多可志（目白大学保健医療学部言語聴覚学科）
指定討論　柳生一自（北海道医療大学心理科学部）

自主シンポジウム②　　１０：００～１２：００　　３０６教室

テーマ　：「特別支援教育における『連絡調整』について考える」

概　要　：今日の特別支援教育では、子ども一人ひとりの特別な教育的ニーズに応じたきめ細やかな支援が求められる。この個別最適化された支援を実現するためには、学校内にとどまらず多岐にわたる関係機関、そして最も身近な存在である保護者との連携、すなわち「連絡調整」が極めて重要な要素となる。しかし、意思疎通や互いの意図の理解、そして信頼関係の構築が難しいケースも散見され、関係改善や連携促進のために、その間を「つなぐ」存在が奮闘している現状がある。その存在はケースによって多様であり、案件ごとのキーパーソンがその役を担い、方々の立場や心情、理解度に配慮しながら関係を調整している。そこで本シンポジウムでは、教育行政、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラーという３つの視点による実践事例の紹介を通じて、連絡調整の現状と課題を共有し、「つなぐ」をキーワードとした、より効果的な連携体制構築に向けた方策を議論する。

企画者　　村田敏彰（北海道文教大学）

話題提供　松田　剛（上富良野町教育委員会）

　　三浦恵子（恵庭市立恵み野旭小学校）

　　蛯名美穂（星槎道都大学）

指定討論　白府士孝（函館短期大学）

自主シンポジウム③　　１３：２０～１５：２０　　３０４教室

テーマ　：「教育と医療の連携について考える～児童精神科ソーシャルワーカーの立場から」

概　要　：平成３０年度に「教育と福祉の一層の連携等の推進について（通知）」が文部科学省と厚生労働省の連名で発出された。教育と福祉においては連携体制の構築・強化、関係機関の相互理解促進と情報共有が進みつつあるが、「医療との連携」は「保護者を通じて」という形が特に精神医療分野では多く見られる。児童精神科ソーシャルワーカーより、その業務・役割、他機関との連携と教育との連携について可能な範囲の事例を加えながら感じていることのお話をいただき、途中フロアからの質問やフロアへの投げかけを加えながら、参加者が「教育と医療の連携」について考える機会としたい。

企画者　　青木一真

（北海道特別支援教育学会道央支部・北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校）

話題提供　星　伸子（こころと発達クリニックえるむの木）

自主シンポジウム④　　１３：２０～１５：２０　　３０６教室

テーマ　：「教育現場における心理・教育アセスメントの活用と課題
～教員・スクールカウンセラー・教育行政の視点から～」

概　要　：教育現場における WISC-Ⅴや KABC-Ⅱなどの心理・教育アセスメントの活用については、近年大きな課題となっている。その一つが、現職教員の多忙さによるアセスメント実施の困難さと検査者としてのスキルアップの機会の減少、二つ目が教員による心理・教育アセスメントの使用権限の課題と公認心理師との連携、三つ目が各市町村による就学指導等における検査者の確保の問題である。本シンポジウムでは、これらの課題について教員・スクールカウンセラー・教育行政の立場から話題提供していただき、教育現場における心理・教育アセスメント活用の現状と課題について検討しながら、これからのよりよい心理・教育アセスメントの活用について共有していきたい。

企画者　　白府士孝（函館短期大学）
話題提供　脇坂貴文（美瑛町立美瑛東小学校）
　　蝦名美穂（星槎道都大学）
　　坂内　仁（北海道教育委員会）
指定討論　青山眞二（北海道教育大学函館校）

＊シンポジウムの打ち合わせは、３０８教室をご利用ください。

【若手教員による交流会】　　１３：１０～１４：１０　　３０３教室

概　要　　：正採用・臨時採用含めて教職に就いて 5 年以内の若手教員が３－４人毎にテーブルに集まり、サイコロ２つを振って 12 の身近なトピックスから気軽に話すフリートーク会です。持ち物は自身の昼食と飲み物です。当日、参加者の希望があれば、大学教員が助言に応じます。事前申し込みは不要ですが、定員 30 名が集まった時点で受付終了となります。

企画・助言　千賀　愛（北海道教育大学札幌校）
　　清都康雄（北海道教育大学教職大学院）
　　村田敏彰（北海道文教大学）

【学生による交流会】　　１３：１０～１４：１０　　３０７教室

概　要　　：で卒業論文の作成に取り組んでいる北海道教育大学、北海道大学、文教大学の４年生が、自身の研究を発表します。普段交わることのない学生同士が、この機会に交流できればと考えています。堅苦しい研究発表ではなく、研究のアイデアや今後の研究方針について和気あいあいとディスカッションしたいと思っています。

企画・進行　　齊藤真善（北海道教育大学札幌校）

４．大会参加費

会員　：２０００円
非会員：４０００円（両日参加）、３０００円（一日参加）
学生　：１５００円

＊参加費は、当日、受付にて、現金でお支払いください。事前予約はありません。
当日、受付で手続きいただければ、会員・非会員にかかわらずだれでも参加できます。
＊当日、学会員になられた方は、２０００円でご参加いただけます。手続きは、受付にてご案内いたします。学会年会費４０００円とあわせて６０００円を、受付にてお支払いください。

５．理事会・総会のご案内

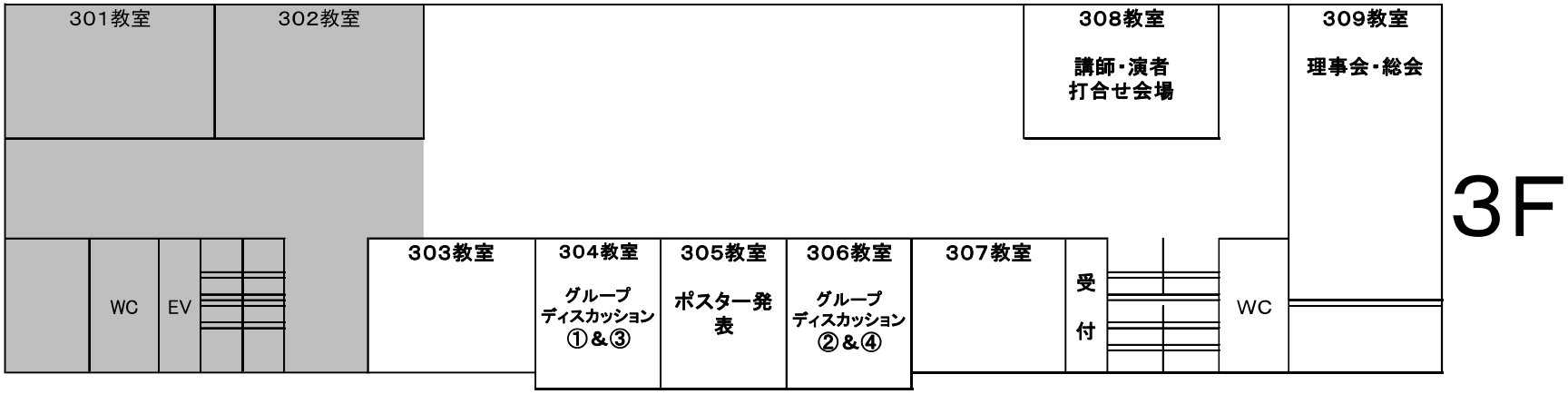
令和７年１１月１日（土）の１１時より、３０９教室にて理事会を開催いたします（昼食をご準備いたしております）。理事会終了後、１２：００より同会場にて総会を開催いたします。会員の皆様のご出席をお待ちしております。

【レセプション(情報交流会) 10/3 まで QR コードから受付中】

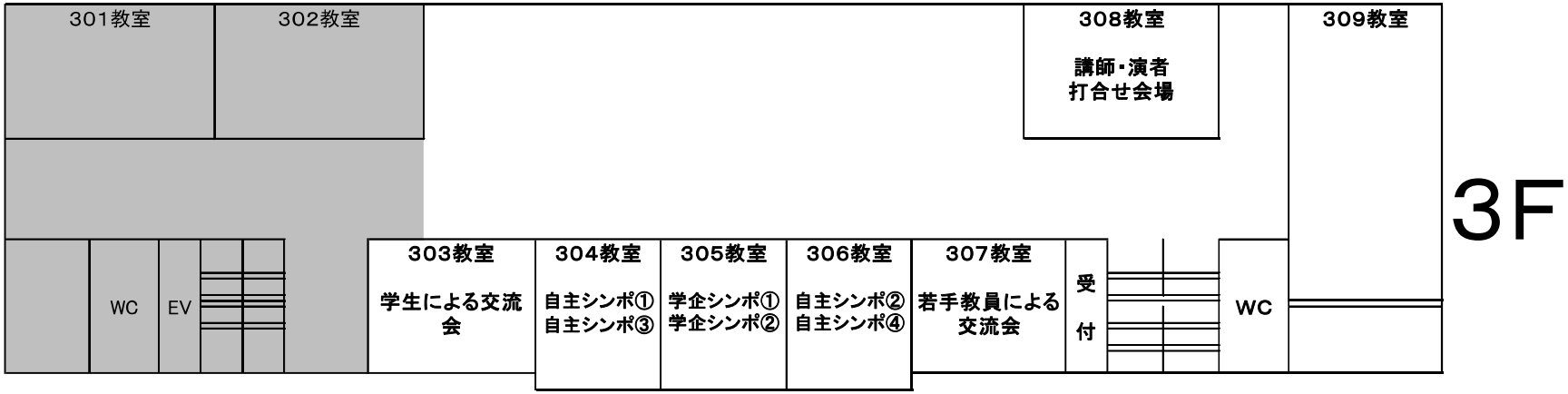
幹事：千賀　愛（北海道教育大学札幌校）asenga92edu@gmail.com
大会 1 日目（11 月 1 日）の 19-21 時半に大通駅から徒歩 5 分の「ビストロサンクシー（Bistro CinqCes）」(中央区南 2 条西 6 丁目 17-2 トシックス 2·6 ビル 1F)でレセプションを開催します。着席の食事ですが、立席しての交流も可能なカジュアルなお店です。参加費は飲み放題込み 5000 円、当日の学会受付又はお店で千賀までお願いします。定員 40 名に達し次第、受付終了となりますのでご了承ください。

＜会場図＞

11月1日（土）



11月2日（日）



６．お問い合わせ

北海道特別支援教育学会第 19 回大会事務局
〒002―8502　札幌市北区あいの里５条３丁目１－３　北海道教育大学札幌校
（札幌大会事務局）　　齊藤真善
E-mail: hkd-asne@s.hokkyodai.ac.jp

最新情報は HP で

北海道特別支援教育学会

http://nc3.hokutoku.net/gh/